

お互いの妹で

～深まっていく、歪な絆～

待宵草

登場人物紹介

篠原蓮(しのはら れん)

会社員。真面目で落ち着いた性格の持ち主。

幼馴染の颯とは家族ぐるみの付き合いが続いている。

篠原滯(しのはら みお)

蓮の妹。少し甘えん坊で誰にでも親切的な、
人懐っこい性格。

水瀬颯(みなせ そう)

蓮の幼馴染。フリーランスエンジニア。明るく軽いノリ
の持ち主で、誰とでもすぐ打ち解けるタイプ。

水瀬柚(みなせ ゆず)

颯の妹。黒髪ロングが印象的な、清楚で真面目な性格。

スマホの通知音が、風呂上がりの濡れた髪を拭いている最中に鳴った。

画面には颯の名前。

親指が湿ったままスワイプする。

『今日、どうだった？ 今から飲みに行こうぜ』

『了解。』

短く返すと、即座に既読がついた。

深夜の居酒屋。

騒がしい客の声が店内を満たしている。

颯はすでにビールジョッキを片手に席に着いていた。

俺が椅子を引くと、グラスが重なる乾いた音がした。

「で、どうだった？ 今日」

颯が身を乗り出す。

ニヤニヤとしたその顔には、隠そうともしない下心が張り付いている。

ビールを一口含み、颯が言葉を継ぐ。

「俺が帰った時にさ、柚に『今日蓮来なかった？』って聞いたんだよ」

「そしたらさ、柚、めちゃくちゃ照れたわけ。顔真っ赤にしてさ」

颯の低い声が鼓膜を震わせる。

「『来てたけど颯いなかったから帰ったよ……』って、目を逸らしてモジモジしちゃってさ」

脳裏に、今日の出来事が戻ってくる。

俺の下で白い身体を震わせていた、柚の顔。

「妹ながら、あの顔めちゃくちゃ可愛かったぜ」

颯が恍惚とした表情を浮かべる。

胸の奥が、小さく熱を持った。

「言えよ、蓮。今日、俺の可愛い妹に何してきた？」

挑発するような問いかけ。

俺はゆっくりとグラスを置き、テーブルの天板を爪で軽く弾いた。

「……最初は、ゲームしてた」

「ゲーム？」

「ああ。ソファで並んで。あいつの肩が触れたんだ」

布地越しに伝わった、柚の華奢な肩の体温。柑橘系の淡い香り。

「それで、我慢できなくなった」

キスしたら、最初は引いていた。すぐに力が抜けて、指先が俺のシャツを掴むだけになった。

「服、脱がせた。ワンピースのボタン、一つずつ」

淡いレースの下着。鎖骨のライン。脇腹に手を滑らせたとき、背中が反った感触。

「ブラ外して、舐めたらさ、柚……甘い声出したよ。

『あっ……』って」

颯の喉が鳴る。

グラスを持つ手が強く握りしめられ、白くなった。

「で、それからどうなった？」

「下、触ったらすげえ濡れてた。脚閉じようとしてたけど、指、奥まで入ってった」

「まじかよ……」

颯の息が荒くなる。

「最後は？ やったんだろ」

「ああ。中に入れた」

「初めて、って震えながら言ったよ。きつかった。でもすぐに慣れて、腰も動き出した」

最初は抑えていた声が、途中から高い喘ぎに変わったこと。中で達したとき、きつく締めてきたこと。そこまで話した。

「最後、あいつなんて言ったと思う？」

俺はビールを飲み干し、空のグラスをテーブルに置いた。氷が底にぶつかる硬い音が響く。

「『私……初めてが、蓮さんで、良かったです……』って」

颯の表情が凍りついた。握りしめたグラスから、水滴が滴り落ちる。

「お前の大事な妹、俺が自分のものにしたんだ」

征服感と背徳感が、同じ熱で混ざる。

「今のお前さ、すげえ顔してるぜ」

颯は濡れた唇を噛み締めて、剣幕でこちらを見ていた。

「あ？」

「颯と滯がやった時、俺もこんな顔だったんだろうな」

俺の声が低く掠れる。

「お前もあの時こんな気持ちだったのか？」

颯が小さく呟いた。

テーブル越しに見つめ合う。

「ああ」俺は短く吐き出した。

「お前と同じだよ」

颯がグラスを掲げる。

俺も空になったグラスを持ち上げる。

ガチャリ、と乾いた音が夜の空気を震わせた。

颯の口元が、ゆっくりと歪む。

「俺たち、似た者同士だな」

「ああ。最低で、どうしようもないクズ同士だ」

「よく言うぜ」

俺は空になったグラスを傾け、溶けかけた氷を口に含んだ。

「でもさ、蓮」

颯が身を乗り出す。

テーブルに肘をつき、声を潜めた。

「お前の妹は俺が可愛がる。俺の妹はお前が可愛がる」

「そういうの、悪くないと思わないか？」

俺の指先が、テーブルの縁をなぞる。

「……ああ」

短く答える。それ以上は必要なかった。

「決まりだな」

颯がニヤリと笑い、手を差し出す。

俺はその手を握り返した。汗ばんだ掌同士が強く絡み合う。

「これからは定期的に報告会だ。お前が柚に何をしたか、俺が滯に何をしたか」

「されたか、じゃなくて何をしたかだろ」

「細けえことはいいんだよ」

颯が空いた手で店員を呼び、ビールを追加で注文する。

「次は二週間後な。その頃には滯のこと、もっと詳しく教えてやれるぜ」

「俺も柚のこと、もっと報告できるようにしておく」

運ばれてきた新しいジョッキを掲げる。

颯も同じように掲げた。

「俺たちの可愛い妹に、乾杯」

「……乾杯」

ガチャリ、とグラスが重なる硬い音が、深夜の居酒屋に響いた。

滯の顔が浮かび、すぐに柚の顔に変わる。

二人の妹を脳内で並べ、俺は冷たいビールで喉を潤した。

颯がポケットからスマホを取り出す。

「そうだ、この前の滯の写真、見るか？」

「……見せろ」

テーブル越しに差し出された画面には、俺の知らない妹の顔があった。

火照った頬。潤んだ目。いつもの無邪気さは、そこになかった。

「いいだろ？ これ、お気に入りなんだよ」

颯が得意げに笑う。

「次はもっとすごい撮ってやるから、楽しみにしてろよ」

「滯は、知ってるのか。俺が見ること」

「最初は嫌がったよ。でも『蓮にも見せる』って言った
ら、黙って撮らせた」

颯は画面を裏返す。

「公平だろ。お前も柚、撮っとけよ」

「……撮っておく」

「マジかよ。そりゃ楽しみだ」

俺たちは再びグラスを合わせた。

俺はビールを飲み干し、新しい一杯を注文した。

今夜はまだまだ長くなりそうだった。

— —

あれから3ヶ月がたった。

俺は今日も颯の家に向かった。

両親も颯もいない。

そういう日は決まって柚が教えてくれるようになった。

インターホンのチャイムを鳴らす必要すらない。

鍵は開いていた。

玄関ドアを押し開けると、淡いピンクのニットを着た柚が立っていた。

3ヶ月前のような初々しい驚きはもうない。

静かに微笑んで、ゆっくりと顔を上げたその瞬間、俺の手は無意識に伸びていた。

華奢な腰を掴んで引き寄せ、その唇を塞ぐ。

「んっ……！」

一瞬だけ身体が強張ったが、すぐに力が抜けていく。

3ヶ月前に初めてキスした時の、硬直した抵抗とはまるで違う。

柚は自分から口を少し開き、俺の舌を受け入れた。

唾液が混ざり合う濡れた音が、静かな玄関に響く。

「ん……ちゅ……れんさ……ん」

甘い吐息が漏れる。柑橘系のシャンプーの香りが鼻腔を満たした。

舌を絡ませたまま、リビングを越え柚の部屋へと向かった。

ドアを閉めると、微かな芳香剤の匂いと柑橘系のシャンプーの香りが混ざり合って俺を包み込んだ。

ベッドに向かって柚の身体を押し倒す。

ふわりと黒髪がシートの上に広がり、スプリングがきしむ微かな音が静寂を破った。

ベッドに押し倒された柚は、俺を見上げて潤んだ瞳を細めた。

いつもの、男を求める顔だ。

3ヶ月前には想像もできなかった、淫らに熟れた表情。

俺はポケットからスマホを取り出した。

「柚、今日はこれで撮るよ」

カメラアプリを起動し、レンズを向ける。

柚の表情が凍りついた。

さっきまでの甘い空気が一瞬で霧散する。

「え……撮るって……動画ですか？」

「ああ」

「や、やです！ 絶対に無理です！」

柚はバツと身を起こし、シーツを胸元まで引き上げた。

顔が瞬く間に赤く染まる。

羞恥心と狼狽が入り混じった声。

「だって……そんなの、誰かに見られたら……」

「ネットには出さない」

俺はスマホを下ろさず、言葉が続けた。

「ただし颯には見せる。あいつの妹を撮って、俺に見せてるのと同じだ」

柚の動きが止まる。瞳が揺れる。

「……兄に、ですか」

「ああ。撮らせてくれないと、今日はしない」

沈黙が落ちる。

柚の視線がスマホと俺の顔の間を行き来する。

唇を噛みしめ、恥ずかしさに耐えるように目を伏せた。

「……わかりました」

蚊の鳴くような声。柚の手からシートが滑り落ちる。

「兄以外には、絶対に見せないで下さい……」

「出さない」

俺は録画ボタンを押した。

赤いランプが点滅するレンズ越しに、柚の羞恥に染まった顔が映っている。

「じゃあいつもみたいに、自分で服を脱いで見よっか」

柚は小さく頷き、震える指先でニットの裾を掴んだ。

淡いピンクの布が持ち上がり、白い脇腹が覗く。

ふっ、と布が頭から抜け落ちた。

揺れる黒髪。露わになった白い肌と、淡いレースのブラジャー。

画面の中で、柚の視線が泳ぐ。

「ん……っ」

小さな息を吐き、背中に手を回す。

パチン、と小さな弾ける音がして、胸元の布がふっと緩んだ。

華奢な肩からストラップが滑り落ちる。

ブラジャーが床に落ちるよりも早く、柚の腕が胸の前で交差した。

「ああ……」

顔を背け、真っ赤に染まった耳まで見えている。

白い腕に押し潰されそうな柔らかな膨らみ。

その隙間から漏れ出すピンク色の先端。

スマホをベッドサイドの棚に置き、アングルを調整する。

柚の全身がフレームに収まった。

赤いランプが点滅し続ける中、俺はベッドの端に腰を下ろした。

柚の隣。肩が触れるか触れないかの距離。

柑橘系の香りが、鼻孔をくすぐる。

俺はゆっくりと、顔を近づけた。

柚の長い睫毛が、不安と期待で小さく震えるのがわかる。

唇が、触れた。

ほんの数秒。羽毛が触れるような接触。

柚の肩が、ビクンと跳ねた。

一度、唇を離す。

濡れた瞳が俺を見上げ、どこか名残惜しそうな吐息が漏れた。

その隙間を埋めるように、再び唇を重ねる。

今度は、深く。

舌先を割り込ませると、柚は小さく口を開いてそれを受け入れた。

「んっ……」

唾液が混ざり合う湿った音が、静かな部屋に響く。

互いの舌が絡み合い、吸い合う。

キスに意識を奪われている柚の隙間に、俺の手が滑り込んだ。

スカートのウエスト部分。

タグの金具に指をかける。

カチャリと小さな金属音がした。

キスを深めながら、スカートの布地を引き下ろした。

滑らかな曲線を描いて、スカートが太ももの下へ滑り落ちる。

俺は唇を離した。

銀色の唾液の糸が引いて、プツンと切れる。

柚の視線が、自分の下半身に落ちる。

スカートが足首に絡まり、床へと抜け落ちた。

残されたのは、白いショーツだけ。

「あ……っ」

柚の顔が、瞬く間に真っ赤に染まった。

無意識に太ももを閉じようとするが、俺の膝がその間に
入り込んでいる。

パンイチの無防備な姿。

それが、点滅する赤いランプに収められているという事実。

「やだ……見ないで……っ」

自分の太ももを隠そうと腕を伸ばす。その仕草まで、画面の中に入っている。

「可愛いね」

俺の言葉に、柚の肩が震えた。濡れた瞳が泳ぎ、潤んだ唇が微かに開く。

「じゃあ次は、いつもみたいにおもちゃを使ってみようか」

柚の表情が凍りついた。

赤く染まっていた頬から、スッと血の気が引いていく。

「えっ……あれ、ですか？」

掠れた声が漏れる。

視線が、サイドボードの引き出しの方へ無意識に向けられた。

「動画撮ってるのに……そんな……絶対無理です……」

柚は首を横に振り、シーツを握りしめる指先に力がこもる。

「俺と颯が見るだけだ。柚の一番可愛いところ、全部見せてくれるよね？」

俺がカメラのレンズを指差すと、柚の喉が小さく上下した。赤いランプの点滅。

「ほら、取っておいで」

短く促すと、柚は数秒間躊躇った後、シーツから手を放した。

震える脚でベッドから降り、引き出しを開ける。

白い掌に寄せられたピンク色の小型のマッサージ器。

柚はそれを持ったまま、再びベッドに戻ってきた。

顔は真っ赤で、泣き出しそうな表情をしている。

「いつもどうやって使ってるの？」

「恥ずかしくて言えないです」

「どうやって使うの？」

俺がもう一度聞くと、柚は俯いたまま、膝の上で両手をぎゅっと握りしめた。

唇がかすかに動くが、声にならない。

「……あの……」

「ん？ 聞こえない」

俺はわざとらしく耳に手を当てて近づく。

柚は一層俯き、長い黒髪が顔を隠した。

ほとんど聞き取れないほど小さな声で、途切れ途切れに呟く。

「……あの、ここに、当ててます」

柚は膝の上で震える手を動かし、自分の下腹部のあたりを恥ずかしそうに指差した。

「パンツの、上から……」

最後の方はもう息のような音になって消えた。

耳まで真っ赤に染まり、視線はシーツの模様に固定されたままだ。

「ふーん、そうなんだ」

俺はスマホの画面を確認しながら、ゆっくりと顔を上げた。

「じゃあ、やってみせてよ」

「えっ……」

柚の肩が跳ねる。

潤んだ瞳が驚きに見開かれ、俺とレンズを交互に見た。

「いま、ここで……ですか？」

「そう。俺に見せてくれないと、どんな風にするのか分からないでしょ？」

あえて平坦な声で言うと、柚は唇を噛みしめ、小さく俯いた。

拒絶の言葉は出ない。3ヶ月のあいだに、この部屋での順番は決まっていた。

「……はい」

震える指先が、ピンク色のマッサージ器を掴み直す。

柚は恐る恐る脚を開き、白いショーツの中心にその丸い先端を添えた。

カチッ。

小さなスイッチの音が、静かな部屋に響く。

ブウン……

低く粘り気のある振動音が空気を震わせた瞬間、柚の細い腰がビクンと跳ねた。

「んっ……！」

短く、高い声が漏れる。

パンツ越しの布地が微かに波打ち、振動がその奥を突き上げているのが傍目にもわかる。

「ひゃ……うっ……」

柚の手が、マッサージ器を押し当てる力を強める。

白い太ももが無意識に内側へ閉じようとするが、自分で押し当てているソレが邪魔をして、半開きのまま震えていた。

ブーン、という機械的な音が、柚の甘い吐息と混ざり合う。

「あっ……そこ……んんっ……」

眉を寄せ、きつく目を閉じる。清楚な顔立ちが快楽に歪んでいく。

画面の中で躍る柚の姿。

パンイチで自ら股間に機械を押し当てている絵が、データとして残されていく。

「声、出てるよ柚」

言うと、柚はハッとして口元を手で覆った。

「んう……ふう……っ」

それでも指の隙間から、抑えきれない熱い吐息が漏れ続ける。

俺はスマホを持つ手を少し安定させ、その震える姿をフレームに収めた。

「気持ちいいか？」

「……はい……っ」

涙目でコクコクと頷く。

頬は火照り、首筋には薄く汗が滲んでいた。

大人しいあいつが自ら快楽を貪る姿。

俺の知る柚とは違う、女の顔だった。

ブーン……という音が一定のリズムを刻む。

柚の手首が小刻みに震え、器具を押し付ける角度を変える。

「あっ！そこっ……だめっ……！」

ビクンと背中が反り、喉の奥から裏返った声が飛び出した。

さっきまでの、耐えるような吐息とは違う。

パンツの布地が湿り気を帯びていくのが、俺の位置からでも微かにわかった。

自分の声に驚いたのか、柚はハッと手を止めかけたが、身体がそれを許さないように再び器具を押し当てた。

「やだ……あ…変になる……っ」

泣きそうな声で訴えながらも、太ももの力は抜けきっていて、自ら足を開いて振動を受け入れている。

「もっと気持ちいいところにあててみて」

俺の言葉に、柚の肩がビクリと跳ねた。

「え……でも……っ」

「ほら」

促すと、柚は潤んだ瞳で俺を哀願するように見つめた。

だが、その手は逆らわずに動いた。

ゆっくりと、震える指先がマッサージ器を上下に滑らせる。

ブーン、という振動音が布地を通して秘裂をなぞり上げる。

「んんっ……！あぁっ……！」

最も脆い場所を見つけ出した瞬間、柚の身体がベッドの上で小さく跳ねた。

白い太ももが痙攣するように震え、シーツを掴む指先が白くなる。

自分で感じる場所を探り当て、そこに振動を押し付ける柚の姿。

「ひゃう……っ！あっ、あっ……！」

もう抑えることなんて忘れたみたいに、高い声が部屋に響き始めた。

「柚、パンツも邪魔でしょ」

俺の言葉に、柚の動きが止まった。

振動に震える指先が、マッサージ器から離れる。

「脱いで」

短く言うと、柚は潤んだ瞳で俺を見上げた。

躊躇するように唇を噛みしめるが、逆らう言葉は出ない。

震える指先が、白い布地のウエストにかかる。

ゆっくりと、腰を浮かせながら引き下ろしていく。

滑らかな太ももの曲線から滑り落ち、足首から抜け落ちた。

露わになった秘裂。

淡い光の中で、恥ずかしそうに窄められていたが、透明な糸を引いて濡れ光っていた。

「脚、開いて。そのまま一番気持ちいいところに当てて」

柚の頬が再び紅潮する。

太ももをゆっくりと開くと、震える手で再びスイッチを入れた。

ブウウン……

低い振動音が響き、柚がピンク色の先端を秘裂に押し当てる。

「あっ……！んくっ……！」

「どこに当ててるのが気持ちいいの？」

俺はカメラの横から、わざと優しく問いかける。

「……っ、ここ、クリトリス……です」

自分の口で言わされている羞恥に、声は震え、目尻はうっすらと涙で潤んでいる。

しかし、その身体は確かに振動を求め、ゆっくりと円を描くように動き始めた。

「ん……っ、あ、あっ……」

「気持ちいいか？」

「き、気持ちいい……です。じんじん、して……先っぽが、とくに……」

呼吸が早くなる。

吐息が甘い声に変わり始める。

布地という壁が消え、ダイレクトな刺激が柚を貫いたのか、背中がベッドに押し付けられ、華奢な腰が浮き上がる。

俺は、床に落ちた白いショーツを拾い上げた。

指先で広げる。クロッチの部分に、はっきりと残った濃い染み。

「柚、見てみな」